人の思いを超えて
導いておられる神様

ルツ記2章1～14節
2022年9月4日
松田 基子 師

旧約聖書は天地万物及び人間の創造主である神様が、ご自身に背く人類を、その、当然受けるべき滅びから救い出すために、歴史を導かれた、その人類救済史を記したものです。 しかし、神様はその事を実現されるにあたって、ご自身の計画で歴史をさっさと進められたのではありませんでした。 神様は時速5キロの神様と呼ばれます様に、罪ある人間に寄り添い、人間に働き掛けて、人間の応答を待たれ、人間と共に**歩いて、歴史を導き続けて**来られました。 それは、人間の**自己中心が**常に神様の**ご計画を阻む**中で、神様はご自身に**聞き従う者**は居ないかと**呼び掛け**、神様に従う一握りの人々によって、**人類救済の**歴史は**導かれて**きました。

神様に聞き従ったのは、立派な預言者達ばかりではありませんでした。 市井の平凡な、
『真の神様に従って生きたい』
と、誠実に歩んだ人々によって、その歴史は導かれてきました。 神様の人類救済の歴史が具体的に明らかになって来たのは、イスラエル人の祖、アブラハムが神様に応答し、人生を賭けて聴き従ったところから、道は開かれました。
その選びは、アブラハムからイサク、ヤコブに受け継がれ、ヤコブは神様からイスラエルの名を貰って、彼からイスラエル12部族が誕生しました。

イスラエル一族は飢饉に遭い、滅びるところでしたが、神様は先にヨセフを選んで、エジプトで最高位を与え、イスラエルの一族をエジプトに寄留させて、アブラハムの血筋を守られました。
400年の後、イスラエルは一つの民族として数を増やしていましたが、王朝は既にヨセフの時代とは、変わっており、イスラエルの民は、エジプトの奴隷となっていました。 神様はアブラハムとの約束を覚え、イスラエルの叫びをお聴きになり、モーセを指導者に立て、時至ってイスラエル民族の、出エジプトを果たさせると共に、荒れ野において40年の間、神様の御言葉に聞き従う訓練を与えて後に、アブラハムに与えると約束されたカナンの地に導かれました。 カナン定着は紀元前1250 年頃から、1200 年頃とされています。 さて、モーセもヨシュアも召されて、傑出した指導者を失ったイスラエルは、神様の人類救済計画を担って行けるのでしょうか。 ヨシュアは、部族毎に土地を割り当て、部族が力を合わせて、与えられた土地を戦い取って行く事を命じました。 そこで生まれたのが、部族を指揮し、また、裁きを行う、裁き人と呼ばれる、士師たちでした。 士師たちの行為を記したのが士師記です。

士師の時代と言うのは、各部族が主体で、民族としての統一が成されていない、不安定な時代でした。 周りの国々は、王を立て、王の下に兵を訓練し、国を守っていた時代です。 その紀元前12世紀の頃、名もない家族、名もない女性が、神様の人類救済のご計画に引き込まれて行きます。 今朝のルツ記1章1節を見ますと、

> **「士師が世を治めていたころ、飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ。 その人は名を、エリメレク、妻はナオミ、二人の息子はマフロンとキルヨンといい、ユダのベツレヘム出身のエフラタ族の者であった。 彼らはモアブの野に着き、そこに住んだ。 夫エリメレクは、ナオミと2人の息子を残して死んだ」**

とあります。

イスラエル地方はヤコブ一族の飢饉によるエジプト寄留に見られました様に、飢饉に悩まされました。 パレスチナ地方は雨期と乾期がはっきりと分かれています。 雨期に十分な雨が降らなければ作物は実りません。 ベツレヘムはユダ部族に割り当てられた地で、ユダ山地にあり、ユダでは最も肥沃な地帯の一つされていました。
しかし、その年は、雨が降らず、作物は実らず、一帯は飢饉に見舞われました。 飢饉になれば人は食糧を求めて移動しました。 自由に移動していた時代です。 エリメレクは死海の西側から、死海の東側に広がる、緑豊かな山地のモアブに移住する事を決心しました。

一家はモアブに移り住んで、きっと居心地が良かったのでしょう。 そこに腰を降ろしました。 二人の息子も成人しました。 これからと言う時に、家長のエリメレクは亡くなってしまいました。 成人した息子達は、父親亡き後、母ナオミを支え、モアブの女性と結婚しました。 家族で力を合わせ、モアブの地で頑張って行こうと決心した矢先、息子二人は体が弱かったようで、二人とも亡くなってしまいました。 ナオミは絶望してしまいました。 そんなナオミを健気に支えたのは、二人の嫁でした。 マフロンの妻ルツとキルヨンの妻オルパでした。 当時の時代背景からの推測ですが、この時ナオミは40歳くらい、ルツとオルパは20歳代初めであったであろうと言われています。 ナオミは二人の嫁に助けられて、何とか暮らしていましたが、ある日、

「死海の西側、あのベツレヘムの地は、緑地が回復し、豊かな収穫が与えられ、食物に潤っている」

との言葉を耳にしたのです。

ナオミはベツレヘムに帰れば、そこにはまだエリメレクの土地があります。 彼女はベツレヘムに帰る事を決心して、その事をルツとオルパに伝えました。 すると二人はナオミに従って同行しました。

『ナオミは旅を始めると、二人の嫁の事が気になり、配慮の無い自分を悔い、二人の嫁の幸せこそ、考えるべき事だと気づきました。』

そこで8節を見ますと、

「**ナオミは二人の嫁に言った。**
『自分の里に帰りなさい。 あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。 どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように』」

と諭しています。 当時の女性達にとって、保護を得るのは結婚でした。 ナオミの心からなる説得に、オルパは同意して自分の実家に帰って行きました。 しかし、ルツは1章16節で、

「**あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。 わたしは、あなたの行かれる所に行きお泊まりになるところに泊まります。 あなたの民はわたしの民、あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に、そこに葬られたいのです**」

と答えました。 この言葉は**ルツのナオミに対する心からの真実の言葉でした**。 ルツには自分の人生に対する打算がありません。 当時の考えからすれば、男性の保護を持たない女性が、姑を養って行く事が、どれ程の苦難を負うことになるのか、想像するだけで、誰も逃れたくなるでしょう。

しかし、聡明なルツは、苦労を考えるよりも、義母のナオミを愛したのです。 ルツは唯ナオミを愛して、彼女から離れる事が出来ませんでした。 苦労を決意しての決断は、後でかならず後悔するものです。 全う出来るのは、愛以外にありません。 ナオミもルツの真実の愛が分かったのです。 そこでナオミはルツの愛を受け入れました。 ナオミはどんなに嬉しかった事でしょう。 ルツの真心を喜んだのはナオミだけではありませんでした。 神様はルツの言葉を聞いておられました。 ルツの

「**あなたの民はわたしの民、**
あなたの神はわたしの神」

との**信仰告白**を**受け入れて**下さったのは**神様**です。 神様は全ての人が神様を知り、自分の**全存在**を神様に**委ね**て生きることを、一番喜び**求めておられる**のです。 神様はその様な人物を通してご自身の御計画を進めて行かれます。

この後、神様は、ルツから目を離されることはありませんでした。 ナオミは愛する嫁ルツを、

「娘」

と呼んで、懐かしい故郷、ベツレヘムに帰ってきました。 しかし、ナオミは、懐かしさと共に悲しみに襲われました。 町の人々はナオミの変わり果てた姿に驚きました。 ナオミ自身、

「**ナオミさんではありませんか**」

と呼び掛けてくる人々に、

「**どうか、ナオミ**（快い）**などと呼ばないで、マラ**（苦い）**と呼んでください。 全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。**
出て行くときは、満たされていたわたしを
主はうつろにして帰らせたのです。
主が私を悩ませ、全能者が私を不幸に落とされたのに」

と言っています。 岩波訳ではうつろを無一物と

訳しています。
　何だか神様に対する恨み言の様に聞こえますが、
　『神様の**なさる事は**自分には**分からな**い。
　しかし全ては**神様の御手で動いて**いる
　のだから、従って行く**しかない**』
と言う思いであったのでしょう。 一方、ルツは、その日の糧を得るために、ナオミから落ち穂拾いに行く許可を得ると、
2章3節に、
　「**ルツは出かけて行き、刈り入れをする農夫たちの後について畑で落ち穂を拾ったが、そこはたまたまエリメレクの一族のボアズが所有する畑地であった**」
とあります。

　ルツの側では、たまたま偶然であるかに見えましたが、神様はすでに**人間の偶然性**の中に**働いて**おられました。 **私達の人生**でも、何故こんな**出会いになった**のか、**その出会い**によって人生が**大きく変わる**と言うことがあります。 わたしたち人間の側では意図しないことの背後で、神様は働いておられます。 それをどう選択していくかは、人間自身の自由意志に委ねられていますが、**神様は**ご自身の**最善を**、ご自身に**信頼する**一人一人に導き**与えて**おられます。 私達はルツ記からその事を**汲み取って**行かなくてはなりません。

　ルツはボアズという人物について、親戚関係にあることも、なにも知りませんでした。 ルツはその偶然性の中で、ボアズの畑で落ち穂を拾わせて貰いました。 落ち穂拾いについては、寄留者、孤児、寡婦など困窮者への救済方法として、律法に定められています。
レビ記19章9節から10節に、
　「**穀物を収穫するときは、畑の隅まで刈り尽くしてはならない。 収穫後の落ち穂を拾い集めてはならない。 ぶどうも、摘み尽くしてはならない。 ぶどう畑の落ちた実を拾い集めてはならない。 これらは貧しい者や寄留者のために残しておかねばならない。
　わたしはあなたたちの神、主である**」
と命じられています。

　ルツは落ち穂拾いをしなければならない自分を、少しも惨めに思うことなく、ナオミに食べさせたい一心で、喜んで落ち穂を拾いました。
一方、土地の所有者ボアズは、ベツレヘムから、郊外にある自分の畑の刈り入れ状況を見にやってきました。 彼が農夫達に、
　「**主があなたたちと共におられますように**」
と挨拶を送ると、農夫達は、
　「**主があなたを祝福して下さいますように**」
と、何とも麗しい双方の信頼が伝わってくる挨拶が交わされました。 そのボアズの目に、畑で働く者達の間に、見慣れない若い女性の姿が映りました。 ボアズは監督の召使いに、
　「**そこの若い女は誰の娘か**」
と尋ねました。 召使いは、
　「**あの人は、モアブの野からナオミと一緒に戻ったモアブの娘です。
　『刈り入れをする人たちの後に付いて、麦束の間で、落ち穂を集めさせてください』
　と願い出て、朝から今までずっと立ち通しで働いて居りましたが、今、小屋で一息入れているところです**」
と答えました。

　ルツは誰の目から見ても、誠実で働き者で好感の持てる女性でした。 ただ彼女には、モアブの娘という、
　『よそ者』
と言う考えが皆の心にはありました。 ところが、ボアズという人は、神様を畏れる故に、人を人として尊び、人の本質を見ていました。 彼はルツに対して、モアブ人、つまり異教のよそ者と言う偏見を捨てて、ルツに近づき、声を掛けています。 8節を見ますと、
　「**私のむすめよ**」
と呼び掛け、
　「**良く聞きなさい、よその畑に落ち穂を拾いに行くことはない。 ここから離れることなく、わたしのところの女たちと一緒にここに居なさい。 刈り入れをする畑を確かめておいて、女たちについて行きなさい。 若い者には邪魔をしないように命じておこう。 喉が渇いたら、水瓶の所へ行って、若い者がくんでおいた水を飲みなさい**」
と言っています。 何と言う人格者でしょうか。
それは神様を畏れて、従っている証明です。
人はルツの様に、人の憐れみを乞うて生きてい

かなければならない人に対しては、
『恵んでやるのだ』
と言う心が働いて、言葉も態度もぞんざいになるものです。 神様を崇め、同じ人間である事の遜りがある人だけが、人の貴さを知った、対応が出来るのです。

ルツはボアズの心からの親切に対して、10節で、
「**顔を地につけ、ひれ伏して言った**」
『よそ者のわたしにこれほど目をかけてくださるとは、厚意を示してくださるのは、なぜですか』」
と尋ねました。 ルツは今まで、この様に自分を尊んでくれる人に出会った事が無く、その理由を聞かずにはいられませんでした。 11節に、
「**ボアズは答えた。**
『主人が亡くなった後も、しゅうとめに尽くしたこと、両親と生まれ故郷を捨てて、全く見も知らぬ国に来たことなど、何もかも伝え聞いていました。 どうか、主があなたの行いに豊かに報いてくださるように、イスラエルの神、主がその御翼のもとに逃れて来たあなたに十分に報いてくださるように』」
と記されています。

ボアズのこの言葉に、何の偽りもありませんでした。 彼は何があっても、神様と相手に対して真実を尽くすつもりです。 神様も**ボアズの祈りに額面通り**にお**答えになる**おつもりです。
ルツはボアズの親切に感激して、
「**私の主よ**」
と呼び掛け、
「**どうぞこれからも好意を示してくださいますように。 あなたのはしための一人にも及ばぬ、このわたしですのに、心に触れる言葉をかけていただいて、本当に慰められました**」
と心一杯のお礼を述べました。

ボアズはルツに農夫達と共に食事をするように招くと共に、若者達がルツを困らせないように、落ち穂を沢山集められるように、配慮するように命じました。 その結果ルツはその日集めた穂を打ってみると、大麦23リットルにもなりました。二人の一週間分の食糧です。 ナオミは自分達の内に成された神様の憐れみに気付いて、
「**どうか生きている人にも、死んだ人にも慈しみを惜しまれない主が、その人を祝福してくださるように**」
と祈ったのでした。

神様はこの後、彼らを素晴らしい祝福の道へと**導いて**下さいます。 本人達の幸せばかりか、彼らが**御心に従う事**によって、知らない間に、神様の**人類救済計画の中に**引き寄せられ、その**役目を担って行く**のです。 この様に、神様は、**歴史の背後にあって**、ご自身に従う者の人生を**御心の道へ**と導いて下さっています。
神様を信じて生きるとは、その**導きを信じ**、神様に**従って生きる**事です。

ローマの信徒への手紙8章28節には、
「**神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています**」
と記されています。 私達も人の思いを超えて神様が最善に導いていて下さる事を確信して、いよいよ神様に信頼し、天を見上げ、従って参りましょう。

お祈りをいたします。
愛と憐れみに満ちておられる
天の父なる神様。

不忠実な私達にも目を留め、愛し、
ご自身の御心に、導き続けて下さる事を
感謝致します。 その御愛を信じ、

神様は最善へと導かれている事を信じ、
心から神様を慕い、御心を求めて従って
行く者とならせて下さい。

救い主イエス・キリストのお名前に
よってお祈りをいたします。
アーメン。